

# AMON MIYAMOTO

宮本亜門



公開対談シリーズ第7回

NINAGAWA 千の目

第7回の「千の目」は演出家の宮本亜門さんが登場。

共に海外でも活躍する演出家同士という組み合わせは、とてもエキサイティング。普段、共に仕事をする機会のないだけに、とにかく互いに聞いてみたい話が尽きない。欧米での仕事のやり方の違いから死生観やおたく話まで、本音で語った対談は、鋭いつっこみ満載の刺激的なものとなった。

蜷川幸雄

# YUKIO NINAGAWA

## まずディスカッションが、欧米では仕事の基本

**蜷川 (以下N)** 「NINAGAWA 千の目」シリーズ、第7回のゲストは宮本亜門さんです。ブロードウェイで日本人として初めて演出した演出家で、言ってみれば僕のライバルです。宮本亜門さんです。(拍手) ここに来るのが嫌だったでしょう。

**宮本 (以降M)** その通りです。はじめの紹介でライバルとか言わないで下さいよ。ホントやりづらいですよ。演出家って怖いんですね。

**N** ニューヨークで『太平洋序曲』を演出しましたよね。もちろんアメリカ人の俳優さんでしょ。どうでした？

**M** とにかく稽古時間が3週間以内で短かったのが、「これは間に合わないのではないか」という恐怖感があって、まず稽古の最初の週間は「はい、始めましょう。一番上のここから……」と動きをどんどんつけていったら、5日後ぐらいから彼らが完全にフラストレーションを抱えているのが分かって「ヤバイ」と思ったのです。つまり「あなたに動かされる駒ではない」と。舞台監督に「亜門、ちょっとやり方が違うのではないの」と言われ、「ああそうか」と気づきましたね。自分が焦っていたんです。

その後からは稽古はまず話し合いからで、「僕はこのシーンをこうしたいがどう思う」という事をディスカッションして、その後動きについて「僕はこう思う」と言ってやっていくようにしました。

**N** イギリスでは稽古の始め方からディスカッションした。日本では手をたたいて始めるが、イギリスでは「では、始めましょうか。あなた達がいい時に始めて下さい」と言われて自然に始まります。「どっちにしようか」とみんなでディスカッションした結果、「僕らは蜷川のやり方でやってみよう」と決まった。亜門さんもディスカッションをしたとおっしゃったが、その通りなんだよね。

**M** ですね。

**N** もう、理屈ばかり言っているでしょう。うるさいでしょう。

**M** そう、うるさい。僕は日本に帰ってきて、本当に日本人ってなんて静かな、なんてよく言うことを聞いてくれるのかと思いました。

**N** 外国から来た演出家が日本で仕事をしがたがるのが分かるよね。日本人である亜門が自分達の土俵でない所でやる大変さはありましたか。

**M** あると思って行ったらそれほどなかった。初めて稽古場に来てみんなと顔合わせがあって、もっと演出家らしい言葉を「この作品は、こうでこうで」としゃべろうと思って準備していったが、結局みんなの前に立った時に自分の意思とは関係なく言い始めてしまったのです。みんなのニコッとした顔が見たくなって、「(英語で)僕は(猿のマンガの)キュリアス・ジョージに似てるって言われてるんだけど」と言うともんなが笑って……。

**N** ばかじゃない。

**M** そう、ばかなんです。まずばかを出すんです。ばかを見せてその後みんながワーツと言った時に、「実は僕がやりたいのは、こうでこうで……」と言う時にすごい幸せを感じるタイプなんですよ。

**N** 利口に見えるように、値打ちを高くするためにまず落としてみせるんだ。

**M** そんな計画的ではなく、なにカスイッチが入ってしまうんです。僕は喫茶店の息子で、サービス業で父も母も生きてきて、「いらっしゃいませ」と言う時の笑顔が好きで幸せになるタイプなんです。

本当に蜷川さんがいらっしゃったことによって、何百回、人に「灰皿を投げないのですか？」と聞かれました。その度に、「俺はこの童顔だし、演出家にはなれないな」というコンプレックスがあったんですよ。

**N** 可愛いと言うことだな。

**M** そう。(笑い) だって、蜷川さんと比べたら……ね。(笑い)

蜷川さんのお蔭で笑顔が好きなのは演出家になれないのかなって、ずっとコンプレックスがありました。

**N** 俺はコンプレックスはなかったと思うが、お互いに演劇界にいて、少し孤立している所があるよな。

**M** この前蜷川さんが「僕は演劇をやっていく上でいろいろな人と戦いながら革

命をしてきた。それは色でいうとモノクロ、白と黒でぶつかってきた。お前のむかつく所は七色でぶつかっている所だよな」とおっしゃいましたよね。

**N** うらやましいんだな。

NINAGAWAもソンドハイムも  
「おたく」の意味でのおたく

**M** 蜷川さんの舞台をずっと拝見していて、本当に日本の演劇界の中で見事に孤立し、自分の道を進み、それがいま世界になり、もっとも最大級の演出家にまでになったというのはすごいですよな。

**N** 最大級までもうちょっとなのですけど。

**M** 何が最大級ですか。

**N** 前はそういうことにちょっと興味があったが、この頃はぼけ老人でどうでもよくなった。

**M** いつから？ ぼけが、ではなくて、どうでもよくなったのはいつからですか？

**N** ここ2年ぐらい。言ってみれば俺は“おたく”なんだと思うんだよ。演劇おたく。今(1月時点)、昼間は『コリオレイナス』の稽古をやり、午後3時過ぎから『ひばり』の稽古と2つやらせてもらっていて、みんなが「大変でしょう」というが、自分では苦ではないわけで、いってみれば「カツ丼を食った」「こんどは天丼だ」という感じなんだよ。

**M** すばらしい。

**N** そのことだけに興味があるんだよ。演出家としてのそびえ立つような権力が欲しいとか、演劇の賞が欲しいとかは別にないし、だいたいもらったし。

**M** 何かむかつく。(笑い) 僕はもらっていないんですから。

**N** もらえないの。

**M** あまりもらえないタイプなんです。“おたく”で思い出したけど、僕がブロードウェイでやった『太平洋序曲』の作曲もした、僕の大好きなスティーブン・ソンドハイムという70歳半ばの作曲家も「おたく」です。結局ほかのブロードウェイの作曲家とかもそうだけど、彼らは人間的にいい意味でおたくで、もうなにかに夢中になって

## 宮本亜門は埼玉で人気があるんだ。 この劇場でやってくれよ。



のすごくさかっただけで、その大変さはすごく分かる。

**M** アメリカはバトンを引張る人はバトンしかさわらない。この人にはこのお金が払われていて、ここでというように恐ろしい分担作業が出来ているので、それをどうやるかですね。正直に言うと、何回も愕然とさせられました。

**N** 自分の領域を越えてはやってくれないよね。ある仕事の時に怒ったら、向こうの責任者が何人か残って手伝ってくれました。時には議論を激しく戦わせないで済む時もありますね。

**M** それは、イギリス人たちの役者に対しても日本人と接し方は同じですか。何か自分の中で変えることはあるのですか。

**N** あるよ。まずディスカッションをやるということを実感しなければならないです。例えば、彩の国さいたま芸術劇場でやった『リア王』で、ナイジェル・ホーソンは稽古が始まると必ず、「蜷川、5分時間をくれ」と言う。「ちょっと幕開きの演技について考えたのだけれど……」とまず意見を言って、妻が最近死んだ老人としてやってみたいと言う。僕は「どっちでもいいよな」と正直思っているが、「ああ、そうかその可能性はあるね。やってみようか」とやってみるがうまくいかない。その日はその通りにやって、翌日また、「蜷川、5分くれ」と、もう2週間ぐらいオープニングが自分でも気に入らなくて、「この人はこうやって作っているのだからそれに立ち会うよりしょうがないなあ」と思うようにしました。

**M** 日本人でそういつてきたらどうします。

**N** 「もう、決めよう」という感じ。(笑い)つまり、日本人には暗黙の了解があるからそれで通用するのだけれど、イギリス人とはそれが有り得ないから徹底的に話し合うより仕方がないのです。それにはものすごく時間を食うが、他者と他者が会おうためにはそのくらいの苦労は当然。キャリア

をきちっと全うしなくてはいけない人たちは仕事に真剣なわけで、だからお互いちゃんと話し合う。それを全員についてやらなければならないのが、日本でやる時とは一番違う。けれど外国で仕事をするので、他者と出会うためにより丁寧にやることに僕は自覚的になったかな。物などをぶつけていたら関係が壊れてしまう。

**M** それをやって、今度、日本の役者とやった時に日本の役者に対して思うことはありますか。

**N** もうちょっと論理的に突きつめて欲しいと思います。そのことを抜きにしてずいぶんやってきているから。だから役者に言うよ。「今はきちっと戯曲を分析しろ。あなたはここに登場する何分前にどこにいて何をして、何をしゃべっていたのだ。その続きでここに出てこい」と。

**M** 一応僕はそのことをやっていますけれど。

**N** やっているんだ。ではオーソドックスにやっているんだ。

**M** 案外古典的なんですよ。

**N** そうだね。そうではないと思った。

**M** どんなふうに演出していると思っていたのですか。

**N** もっと感覚で。

**M** 絶対そうではないかと思ったんだよね。この前蜷川さんの衣裳も担当している前田文子さんと一緒にの時に、文子さんから「蜷川さんが稽古場で「俺は亜門みたいに転換だけうまいから」と言った」と聞きました。(笑い)

### 死より、自分のジャッジが 狂うことの方が心配

**N** 次の作品は準備している？

**M** 今年はタン・ドゥンのオペラ『TEA』を、アメリカのサンタフェで上演します。

**N** それは新しい作品なんだね。

**M** そうです。現代オペラです。ジャンル



を越えるのが好きなんです。蜷川さんは最近の作品数は異常ですよ。これはどうして？

**N** いつ死んでも大丈夫なように、やりたいたいことをやるんだよ。

**M** 蜷川さんに聞きたいのは、今、死というものに対してはどう思っていますか。

**N** それは来たらしょうがないと思っています。イギリスのナショナルシアターで『近松心中物語』をやっている時に、胃潰瘍で2週間ぐらい物を食べられなくて吐きっぱなしで、ホテルに寝ていて真っ暗にしていると、寝ている自分の姿が何となく浮かんでいて。そういうことを通過してきたから、死ぬというのはあっちに行ったり、こっちに行ったりでそんなに大したことはないかもなあ自分で思った。だから時期が来たらそれはしょうがない。それまで何が心配というのは鼻っばしらが強く、自分の仕事を誇れる作品が自分の眼で見えていつまで作れる、そのジャッジは自分でやっていて、そのジャッジが狂っていたら終わりだが、狂わない準備はしているので大丈夫だとは思。それだけが心配で、死ぬとかはどうでもいいかなあと思っている。

**M** 僕もジャッジが狂っていたらできないですよ。

**N** 舞台稽古で「ああ、ここまでだなあ」と思わない？ 「失敗したなあ」って、ゲネプロで思わない？

**M** 思わない。

**N** ええっ、幸せだな。

**M** ゲネプロでは思わないが、初日が開いた後に思う。稽古場の後半になると客観性がどんどん出てくるではないですか。初日が開いた後「もう少し、こういうのがあったのかなあ」とかいろいろ違うアイデアが出てきたり、演技でももう少しここはこうだったと思うことはあります。

**N** 僕はゲネプロでだいたい決着が着いている。「ああ、俺の才能もここまでか」「〇〇が悪いからこの作品はメチャクチャだよな。でも言えねえな」と思ったりするが、「これは世界中で俺しかできない」と思うことはない？

**M** 僕も同じです。そういう意味では自分が天才ではないかと思う時もあります。

**N** どんな時に思った。

**M** 今も思っていますよ。僕は「これが」ということは思わないし、これが失敗だともあまり思わないタイプです。もしかして世間で失敗だと思われるのもでもいとおしく愛情が入っているから。

**N** それは変態だろう。

**M** たから変だと最初から言っているではないですか。だからこうやって仕事が出来ているんだもの。蜷川さんは自分が普通の人だと思っているのですか。(笑い) 観客のみなさんも普通ではないと思っていて、今日は見世物小屋を見るような気

#### ■ 演出家 宮本亜門

1958年生まれ、東京都出身。出演者、振付師を経て、2年間ロンドン、ニューヨークに留学。帰国後の1987年にオリジナルミュージカル『アイ・ガット・マーマン』でデビュー。翌88年には、同作品で「昭和63年度文化庁芸術祭賞」を受賞。ミュージカルのみならず、ストレートプレイ、オペラ等、現在最も注目される演出家として、活動の場を広げている。2004年秋には、ニューヨークのオンブロードウェイにて『太平洋序曲』を東洋人初の演出として手がけ、05年同作はトニー賞の4部門でノミネートされる。昨年は、演出したオペラ『コジ・ファン・トゥッテ』が文化庁芸術祭大賞を受賞。今年1月にブロードウェイ・ミュージカル『スウィーニー・トッド』を上演し、7月に米国・ニューメキシコ、The Santa Fe Operaでタン・ドゥン作曲オペラ『TEA』、11月にはミュージカル『テイク・フライト』を上演予定。

#### ■ (財)埼玉芸術文化振興財団芸術監督・演出家 蜷川幸雄

埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年4月には「さいたまゴールド・シアター」の活動を開始。6月には、イギリスでのRSC主催ザ・コンプリートワークスに日本で唯一招待され「タイタス・アンドロニカス」を上演し、絶賛を浴びた。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。

分で来ているはずですよ。

**N** それは宮本亜門を見に来ているんだよ。今日はにぎわっているよ。埼玉で人気があるんだ。この劇場でやってくれよ。

**M** やりたいですよ。呼んで下さいよ。どこもすごくいい空間ですよ。

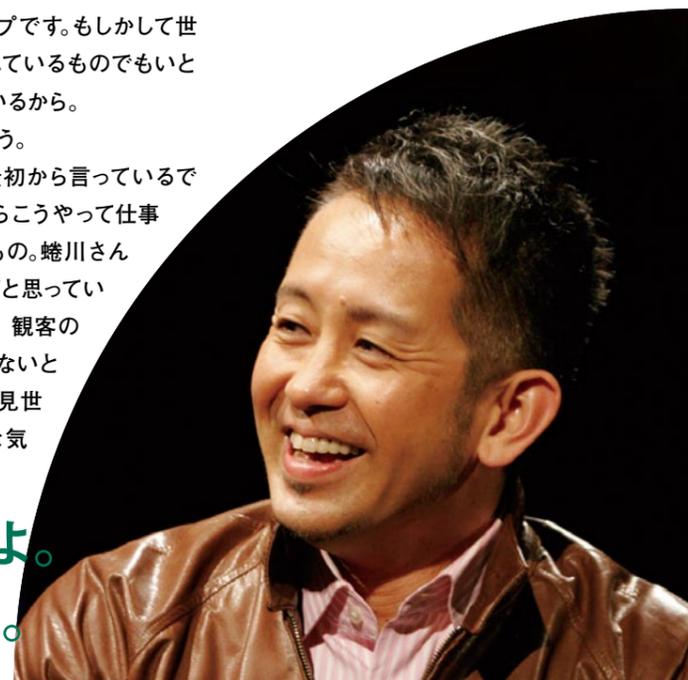
**N** 稽古場もいいよ。(拍手) すごくいいよ。宮本亜門でしかできない贅沢ない舞台をここで作って発信してよ。(拍手) 嫉妬はあるけれど、嫉妬はないんだよ。

**M** もし僕がミュージカルでなくてストレートプレイをやりたいと言ったら嫌でしょう。

**N** そんなことはないよ。我慢する。(笑い)

**M** もう、最高！ 蜷川さんて可愛い人ですよ。

2007.1.8 彩の国さいたま芸術劇場 小ホールにて



しまったら、周りは手が付けられない。だけどその熱さたるや、大したものて人を感動させる。僕はこれでいいんだなと思いました。彼らは全然すかしていないし、一流の人はやはりそこまで行き着いちゃうんでしょうね。

**N** 優れた人間って、すごく開かれている所があったりして、ある所ではとっても親しみやすく、世界が共有出来たらすごくオープンになるが、それはやはりソンドハイムも同じなんだ。

### 論理でつきつめるのが 欧米流の演劇

**N** ブロードウェイではリハーサルはどういう所でやるの。

**M** タイムズスクエアの近くで、汚いビルの四階でした。日本でブロードウェイ、ブロードウェイと言われてすごく期待して行くでしょ。行くと稽古期間はない、お金はないし、舞台寸法は取れない稽古場で本当に苦しかったです。

**N** それは分かる。俺も初めてウエストエンドでやった時に「お金は使えないよ」と最初に言われた。日本ではアンダーグラウンドより商業演劇はお金を使えるが、それとは全く逆で、だからお金が使えなくても

やりたいですよ。呼んで下さいよ。  
どこもすごくいい空間ですよ。